

## 講師略歴

あらせ かつみ  
荒瀬 克己



1953年京都府生まれ 64歳  
2003年より京都市立堀川高等学校校長、京都市教育委員会教育企画監を経て  
2014年4月より大谷大学教授  
文部科学省改革推進本部・高大接続改革チームメンバー、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構国立大学教育研究評価委員会委員。中央教育審議会の各種委員を歴任。

【専門】言語技術・コミュニケーション・国語教育・組織経営

### 【著書・論文】

『奇跡と呼ばれた学校－国公立大合格者30倍のひみつ』（朝日新聞社 2007）  
『「言葉の力」について』（『日本語学』28（2）（通号345）（明治書院））  
『内発的動機づけ』（『大学教育学会誌』31（1）（大学教育学会））  
『実践フォーラム 二つの力－見えるものと見えないものと』  
『関西教育学会年報』（32）2008（関西教育学会）  
『子どもが自立する学校』（共著、青灯社 2011）  
『アクティブラーニング実践Ⅱ』（共著、産業能率大学出版部 2016）  
『「アクティブ・ラーニング」を考える』（共著 東洋館出版社 2016）

その他

現在、「月刊高校教育」（学事出版社）に『荒瀬克己のおとなの探究基礎』を連載中。  
2007年、NHK番組「プロフェッショナル仕事の流儀」で『背伸びが人を育てる』校長・荒瀬克己」として紹介。

### 【著書】

『生者／死者論－傾聴・鎮魂・翻訳－』  
「死んだら終わりですか？－慈悲のかわりめー」（共著・ペリカン社・2018）  
『後世物語聞書聴記』（東本願寺・2017）  
『ボランティアは親鸞の教えに反するのか』（法蔵館・2016）  
『信仰とは何か（一）「他力の信心－親鸞の仏弟子観－」』（日本仏教学会・2013）  
『仏教とキリスト教の対話Ⅰ～Ⅲ』（共著・法蔵館・2000～2004）  
『正像末和讃を読む』（大阪教区・2005）  
『キリシタンが見た真宗』（共著・東本願寺・1998）

### 【論文】

「真宗教学の近代化と現在－浄土理解の変遷を通して－」  
（『親鸞教学』第82/83号所収）  
「ポストモダンと真宗」（『大谷学報』第79巻第2号所収）  
「真宗（もしくは真宗学）における実践学の可能性」（『親鸞教学』第79号所収）  
「真宗における「内的平和と暴力の克服」－第五回ルードルフ・オットーシンポジウムより－」（『親鸞教学』第88号所収）  
「信心発起という出来事－法然・隆寛との思想的交流を通して」  
（『親鸞聖人七百五十回御遠忌記念論集『教行信証』の思想』所収）  
「親鸞と末法(上)」（『親鸞教学』99号所収）  
「親鸞と末法(下)」（『親鸞教学』100号所収）



きごし やすし  
木越 康

1963年カリフォルニア生まれ 55歳  
1990年3月 大谷大学大学院博士後期課程満期退学（真宗学）  
財団法人私学研修福祉会国内研修修了（東京大学文学部宗教学科）  
大谷大学短期大学部助手、大谷大学講師、准教授を経て、  
2013年4月より大谷大学教授  
大谷大学学生部長、教育・学生支援担当副学長を歴任し、  
2016年4月より大谷大学長兼大谷大学短期大学部学長

【専門】真宗学

## 新しい大谷大学を象徴するメッセージ／「Be Real－寄りそう知性」

2018年4月より、大谷大学はこれまでの文学部に、新しく社会学部と教育学部を加えた「3学部体制」となりました。

それに伴い、大谷大学を象徴する新メッセージを作成しました。

「Be Real－寄りそう知性」です。

「Real」には二つの「実」の意味を含みます。一つは仏教という「真実」です。人間の思慮分別や価値判断が加わる前の世界、真理の姿を指し示す言葉。もう一つは目の前の「現実」です。社会問題や一人ひとりが経験する苦悩など、世の中に現れる具体的事象。そして「Be」は「足場をおく」、「成る」。

「Be Real」とは、真実を立脚地として、世の中の現実を生きていこうという態度を表す言葉であり、また、世の中の現実に向きあいながら真理を探究していこうという姿勢を表す言葉です。真実と現実とにしっかりと足場をおいて、本来あるべき人間の姿、あるべき社会を探究し、創造していこうというメッセージが「Be Real」です。

そして「寄りそう知性」とは、「Be Real」をより具体的に表現したサブフレーズです。仏教の理念に基づく本学において、どの学部・学科で学ぶことになろうとも、学ぶことで得られる知性は「他者に寄りそう」ことにはならず。仏教の智慧は、必ず人間に慈悲を生み出す力となる。それが「寄りそう知性」です。

大谷大学長 木越 康